

# 戦後青森県の市長選挙と歴代市長 ⑦

藤 本 一 美

## <総目次>

序文

第一部 戦後青森市長選挙と歴代市長（『政治学の諸問題 X』〔専修大学法学研究所, 2020年2月〕）

第二部 戦後八戸市長選挙と歴代市長（『専修法学論集』第138号〔2020年3月〕）

第三部 戦後弘前市長選挙と歴代市長（『専修大学社会科学研究所月報』第862号〔2020年4月〕）

第四部 三沢市長選挙と歴代市長（『専修法学論集』第140号〔2020年11月〕）

第五部 五所川原市長選挙と歴代市長（『専修大学社会科学年報』第101号〔2021年2月〕）

第六部 黒石市長選挙と歴代市長（『専修法学論集』第141号〔2021年3月〕）

第七部 むつ市長選挙と歴代市長（『専修法学論集』第142号〔2021年7月〕）

第八部 十和田市長選挙と歴代市長

第九部 平川市長選挙と歴代市長

第十部 つがる市長選挙と歴代市長

\*参考資料

結語

## 第七部 むつ市長選挙と歴代市長

### <目次>

第1章 むつ市の概要

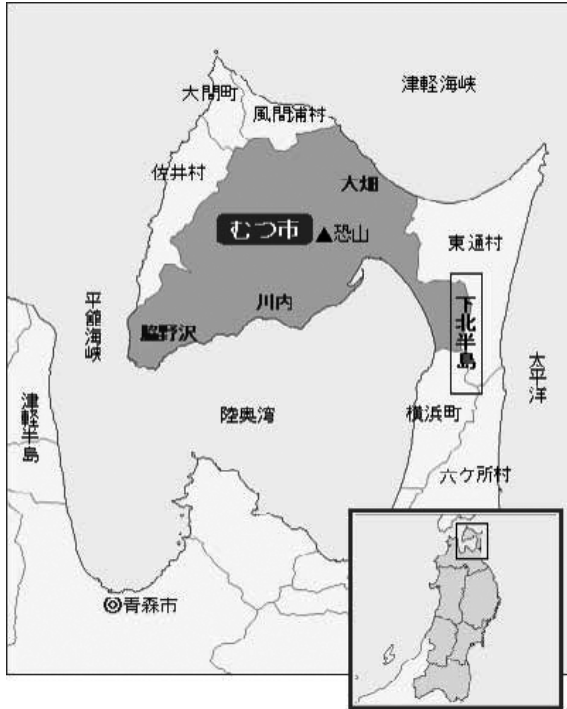
第2章 むつ市長選挙

第3章 歴代むつ市長

第4章 政権交代の類型（パターン）

## 第1章 むつ市の概要

<図> むつ市の位置



出典：『むつ市ホームページ』

むつ市は青森県の東北部、下北半島に位置し、陸奥湾と津軽海峡に面する本州最北端の都市である。2005年の市町村合併で、青森県の総面積の約11%を占める県内で最も大きな面積を持つ自治体となった。

むつ市を構成している大湊町は、戦前から日本海軍の「軍港」として発展、戦後も、海上自衛隊大湊地方隊が置かれている。一方、田名部町は、江戸時代に南部藩の代官所が置かれるなど、下北半島の物流、交通、およ

び文化の中心として栄えてきた。1959年9月1日、下北郡田名部町と大湊町が合併して、青森県8番目の大湊田名部市が誕生。当時、日本一長い名称の市（5文字）となった。

1960年、大湊田名部市から現在の「むつ市」に名称を改め、日本で初めての平仮名の都市となった。むつ市は下北地方の中核都市であり、周辺自治体に広がる人口約7万5,000人に及ぶむつ都市圏を形成している。ただ、人口は減少傾向で、旧むつ市の人口はほぼ横ばいである一方で、旧大畑町、旧川内町、および旧脇野沢村の人口は減少している。

2020年2月1日現在（前月比）、人口は5万6,738人（-52人）であり、世帯数は1万8,912世帯（-34世帯）を数える。

なお、気候は西岸海洋性気候に属し、冷涼な気候である。また、11月下旬から4月上旬まで雪に覆われ、冬は日本海側気候ではあるものの、その他の季節は、日本海側気候と太平洋側気候の両方の影響を受ける。また、夏は北東風（ヤマセ）の影響などにより涼しい時もあるが基本的には高温多湿な日々である。一方、冬は特別豪雪地帯ほど大量の雪は降らないとされているが、県内でも豪雪地帯の一つで生活するのにはやや不便である。

観光スポットとしては、“恐山”が有名で、恐山は、下北半島の中央部に位置する活火山である。カルデラ湖である宇曾利山湖の湖畔には、日本三大霊場の一つである恐山菩提寺が存在し、霊場内には温泉が湧き、共同浴場としても利用されている。恐山を中心にした地域は、「下北半島国定公園」に指定されている。

## 歴代市長、就任日・退任日、任期

氏名	就任日	退任日	任期
杉山勝雄	1959年10月03日	1965年 8 月31日	2期 (1965年 9 月30日、 現職で死去)
河野幸蔵	1965年10月20日	1973年10月19日	2期
菊池渙治	1973年10月20日	1977年10月19日	1期
河野幸蔵	1977年10月20日	1981年10月19日	1期
菊池渙治	1981年10月20日	1985年10月19日	1期
杉山肅	1985年10月20日	2007年 5 月31日	6期 (2007年 5 月31日、 現職で死去)
宮下順一郎	2007年 7 月15日	2014年 5 月19日	2期 (2014年 5 月19日、 現職で死去)
宮下宗一郎	2014年 6 月29日		2期

出典：『むつ市ホームページ』

## 第2章 むつ市長選挙

## ①1959年の市長選挙

1959年9月1日、大湊田名部市が発足し、初代の市長を決める選挙は10月3日に行われ、3人が出馬した。その結果は、元県議で革新系無所属・新人の杉山勝雄（49歳）が6,260票を、前・田名部町長の石沢完（58歳）は6,062票を獲得し、杉山が石沢を下して当選した。前大湊町長の佐々木由吉（52歳）は5,684票に留まった。投票率は激戦を反映して高く、82.41%を記録した<sup>①</sup>。

上で述べたように、10月3日に行われた初代の市長選では、無所属新人の杉山が6,260票を獲得、石沢を接戦の末破り、初の市長のイスに就いた。次点の石沢との両者の差は、198票にすぎなかった。

杉山の勝因は、①杉山が最近まで社会党に所属していたが新市の市長は一党一派に偏してはならないと、立候補にあたって同党を離脱した、②従来、杉山は革新系であったが、杉山は勤労者ばかりでなく、広く中小商工業者の間からも強く支持されていた、③新市の首長としての杉山の手腕・力量が有権者から高く買われていた、ことなどが挙げられる。

一方、石沢の敗因としては、前年12月の田名部町長選で獲得した6,400票に頼りしすぎた点があり、主力を田名部地区に置き、大湊地区は力を抜いたことが得票に影響した、と見られた。また、自民党支部の大勢も終始石沢側に不利であって、当初、公認申請したが無視され、辛うじて自民党県連が公認したという経緯も災いした。なお、佐々木の敗因は、支持層が田名部地区より少ない大湊地区に限定されていた、ことなどである<sup>(2)</sup>。

大湊田名部市長に初当選した杉山は、今後の課題について、次のように語った。

「下北はこれまで政治的に不毛の地といわれてきたが、これからは政治力を結集して市民から託された新しい責任を果たして行きたい。このためには保守とか革新とかの立場を離れて新しい町づくりに専念したい。とくに大湊田名部という地域的な感情対立を一日も融和しなければならない。今生まれたばかりの市であるから何よりも市民の団結と協力が大切であると痛感する」<sup>(3)</sup>。

その上で、杉山は公約として ①田園工業都市の建設、②10万人を抱擁する都市計画、③融和と親愛の市政確立、の三つを挙げた<sup>(4)</sup>。

詳述するなら、大湊町と田名部町の合併は、「難産」であった。しかし、1954年10月の県議会で承認され、ようやく実現した経緯があった。初代市長を決める市長選挙は10月3日に施行されたものの、合併賛成派、反対派の対立はそのまま選挙戦に持ち込まれ、しのぎを削る運動が続けられた。田名部町からは強力な合併反対派の石沢完、次いで、有力な“第三者”として社会党選対本部長で県議の杉山勝雄、そして、大湊町からは前町長の佐々木由吉が出馬して、三つどもえの戦いとなった。結果は、合併問題にタッチしていなかった無所属中立の杉山が、石沢と佐々木を制し、初代市長に就任した、というわけである<sup>(5)</sup>。

なお、大湊田名部という市名は、全国で一番長く、いかにも合併の産物であるといわれ、評判が悪かった。そこで杉山は、翌1960年1月、市名改

称に乗りだし、紆余曲折の末、仮名の「むつ市」に決定した<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 「大湊田名部市」『東奥年鑑 昭和35年度版』〔東奥日報社、1960年〕、66頁。
- (2) 『デーリー東北』1959年10月4日。
- (3) 『東奥日報』1959年10月4日。
- (4) 「初代大湊田名部市長一杉山氏、小差で当選」同上。
- (5) 同上。
- (6) 「大湊田名部市長選挙」前掲書『東奥年鑑 昭和35年度版』、46頁。

②1963年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は9月20日に実施、現職の杉山勝雄（53歳）、元田名部町長の石沢完（62歳）、および前県議の佐藤健次（58歳）の3人が立候補した。その結果は、杉山が7,798票を、無所属の石沢完は6,925票を獲得、杉山が石沢を僅差で押さえて再選された。無所属の佐藤は3,544票に留まった。投票率は、前回と同様に80.65%と高かった。

9月20日に行われたむつ市長選挙は、県内八市の中で初めて記号式を採用し、自民党推薦で現職の杉山が早々と再選を決めた。杉山は現職の強みを十分に発揮し、次点の無所属・石沢に873票の差をつけて勝利したのだ<sup>(1)</sup>。

選挙戦では、杉山が終盤石沢に追い込まれたものの、自民党の団結に支えられて終始リードし、前回の雪辱を期した石沢を引き離した。また、社会党の後援を得て、無所属で出馬した佐藤は労組組織に乗って善戦したが及ばなかった<sup>(2)</sup>。

今回の市長選は波乱含みであった。何故なら、杉山が突然自民党に入党したからである。社会党出身の杉山が自民党に転身しての選挙となったため、市政界は大きく揺れ激しい攻防が繰り広げられた。市長選に先立って、革新系無所属だった杉山は、「むつ製鉄」の事業を促進することを理由に

前知事・山崎岩男の紹介で自民党に入党し、自民党公認で立候補したのだ。これに反発した石沢、また、社会党公認の佐藤も出馬した。確かに、杉山はかろうじて逃げ切り再選したとはいえ、800票足らずの辛勝は杉山の、いわば“転身”に対する批判と見られたのは否めない<sup>(3)</sup>。

再選を果たした杉山は、当選の喜びと今後の課題について次のように語った。

「今回の選挙は、はじめから勝利を確信していた。しかし自民党に入党したこと、現職の市長であることから、批判を受ける立場にあるので、気持ちは楽だったが、選挙戦を通じて苦戦した。過去4年間の実績を評価し、今後に期待してくれたのが得票となったものと感謝している。政策面ではむつ製鉄の早期稼働案を知事を通して強力に働きかける。関連事業として石灰石、木材を利用した産業をおこし、市民の所得の増大をはかっていくつもりだ。また財政は旧町から引き継いだ赤字のうち、一期で43%を解消したが、残る57%を解消し健全財政を確立する」<sup>(4)</sup>。

既述のように、投票所では、はじめての記号式投票に戸惑う有権者もいた。だが、開票事務は敏速に終わりおおむね好評を呼んだ、という<sup>(5)</sup>。

#### 〈注〉

- (1) 「杉山氏、再選さる—むつ市長選」『デーリー東北』1963年9月21日。
- (2) 同上。
- (3) 「むつ市長選挙」『東奥年鑑 昭和39年版』〔東奥日報社、1963年〕、53頁。
- (4) 「杉山氏、小差で再選」『東奥日報』1963年9月21日。
- (5) 『デーリー東北』1963年9月21日、『東奥日報』1963年9月21日。

### ③1965年の市長選挙

杉山勝雄は1965年9月30日、市長在職中に死去、享年55であった。そこで10月20日、後任を決める市長選が行われた。市長選には、都合4人が立候補したが、結果は、自民党公認で前県議の河野幸蔵（42歳）が7,239票を、市議会議長で無所属の菊池渙治（54歳）は6,220票を獲得し、河野が

菊池に1,019票の差をつけて三代目の市長に当選した。社会党の佐藤健次(58歳)は5,442票,また,共産党の新谷昭二(38歳)は263票に留まった。選挙戦は激戦を反映し,有権者の関心も高く,投票率が80.74%に達した<sup>(1)</sup>。

敷衍すれば,いわゆる「むつ製鉄」の事業断念により,下北地区の住民は大きな挫折感を味わい,また,その“終戦処理”にあっていた杉山勝雄が9月30日に急死し,その後釜を決めるむつ市長選挙が10月20日に行われた。戦いは,自民党の前県議・河野候補,無所属で市議会議長の菊池渙治,社会党の佐藤健次,および共産党の新谷昭二による四つどもえの戦いとなった。選挙戦の焦点は,むつ製鉄に代わる下北開発に絞られ,各候補の主張は「中央依存に傾斜した考えを反省し,既存産業とのかね合いを図る」(菊池),「地元市民の声を聞いて身近なものから解決していく」(河野),「地区の体質に即応した事業を取り上げる」(佐藤)などで,各候補者は公約を市民に広く訴えた<sup>(2)</sup>。

選挙結果は,本命と目されていた河野が予想どおりに票を重ねて勝利した。河野の勝因は,他の候補に先駆けていち早く公認を獲得した出足のよさ,河野,中島,石沢,および杉山の党内四派の結束と“中央に直結した市政”の訴えが有権者にアピールした点,などが挙げられる。しかし,菊池との票差が約千票と小差であったこと,また,自民党としても河野の得票を最低7,500票と踏んでいた点からして,辛くも逃げきった感がある<sup>(3)</sup>。

新しくむつ市長に当選した河野は,次のように喜びと課題を語った。

「非常に苦しい選挙だった。しかし,故杉山市長の残したいわゆる田園工業都市づくりとさらに下北開発の将来はかかって私の肩にあることを十分自覚し,市民の要望に耳を傾けながら積極的に推進しなければならないと思う。今後中央政府との結びつきを考え,新しい下北の在り方に真剣に取り組みたいと強く決心している」<sup>(4)</sup>。



『デーリー東北』は、今回の市長選の流れを次のように報道している。

「むつ市長選はさる10日告示以降、自民党の大看板と親子三代にわたる政治歴を有する同党公認の河野幸蔵氏が苦戦、無所属菊池渙治、社会党佐藤健次両氏をようやく押さえ、次点菊池氏を千票離し栄冠をかちえた。むつ製鉄問題で政治への不信感が高まっている折からの市長選と、さらに封建色の濃い田名部地区では政党か人物かの一点にしばられ、それだけに有権者も従来に見られない沈黙ムードに包まれ、地元候補としての河野、菊池両候補とも投票当日までまったく票読みができないという苦しいコマの進め方であった。しかし、投票率80%が示すように有権者の関心は意外に高く、こんごのむつ市政にたいする期待の大きさを物語っていた」<sup>(5)</sup>。

＜注＞

- (1) 『東奥日報』1965年10月21日
- (2) 『東奥年鑑 昭和41年版』〔東奥日報社、1965年〕、40頁
- (3) 同上。
- (4) 「河野氏、初当選飾る一新しい下北と真剣に取り組む」『デーリー東北』1965年10月21日。
- (5) 同上。

④1969年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は10月9日に行われ、これには、現職の河野幸蔵(46歳)、元田名部町長の石沢完(67歳)、および共産党県常任委員の小浜秀雄(36歳)の3人が出馬した。結果は、河野幸蔵が1万1,065票を獲得し、石沢完(8,831票)に2,234票の差をつけて再選された。小浜は821票に留まった。選挙戦では、河野が現職の強みを遺憾なく発揮し、また、県知事の竹内俊吉をはじめ自民党県連幹部が相次いで応援したことも大きかった。投票率も高く、79.14%を記録した<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、むつ市長選は10月9日に行われ、現職の河野が石沢に2千票余の差をつけて当選を果たした。今回の市長選は、来春に予定される衆院選の前哨戦と位置づけられたばかりでない。市政施行10周年を迎

えて新たな転機を迎えた、むつ市における今後の発展方向を決める重要な選挙であった。そこで、中央と直結し、懸案事業の発展を図ろうとする河野、一方、“自主体制”の確立を目指す石沢、また、中央直結の市政打破を掲げる、共産党の小浜の三つどもえの選挙戦となった<sup>(2)</sup>。

結果は、現職の強みを誇る河野が郊外で強さを発揮し、自民党県連による強力な後押しもあって再選された。河野の勝因は、早くから党の公認を取りつけ、組織を固め順調なスタートを切ったことだ。また、市議会29人(1人欠)のうち17人の多数を占める自民党市議、各種の団体、および市内全域に3千人をこえる後援会組織をバックに、大湊地区、郊外地帯で圧倒的強さを見せて、勝利につなげた<sup>(3)</sup>。

再選を果たした河野は、当選の喜びと今後の課題について、次のように語った。

「これだけの差をつけて勝ったのは、これまでの私の市政が正しく評価されたものと思う。本当にうれしい。みんな支持者のおかげです。二期目の市政は、私にとっては仕上げの時期とっていいだろう。政治生命をかけて懸案事項に当たりたい。むつ市の発展はそのまま下北の発展といえる。大湊港の重要港湾指定と、土地造成中の下北ふ頭への企業誘致、さらに原子力船母港、肉牛導入などにも一応メドをつけるつもりだ。それとともに、これまでである意味では犠牲になっていた市道の舗装、保育所の増設、水道整備など市民の生活に直結したキメ細かな市政をやりたい」<sup>(4)</sup>。

『デーリー東北』は、河野再選の意義を次のように報じている。

「いずれにせよ今度の選挙で注目されるのは、自民党公認候補が勝ったということ、40年(1965年)11月の八戸市長選から始まって、青森市長選、弘前市長選、参議院議員選に続いて五度目で、やっと雪辱を果たした。このことは来月行われる八戸市長選や、新年早々に予想される総選挙にも微妙に影響することだろう」<sup>(5)</sup>。

『東奥日報』は河野が再選された要因を紹介する一方で、次のような警

告を發した。

「結局は河野氏の過去4年間の市政に目立った失政がなくまた原子力船母港の設置をはじめ国定公園の指定、さらに肉牛基地づくりなど、着実に市発展の基礎を築いてきたことが有権者に認められたわけだが、それにしても田名部地区では相当に苦戦したのは事実で、今後こうした反対票の重みを十分かみしめる必要があるだろう」<sup>(6)</sup>。

《注》

- (1) 『デーリー東北』1969年10月10日。
- (2) 「むつ市長選」『東奥年鑑 昭和45年版』〔東奥日報社、1965年〕、43頁。
- (3) 「郊外で強さを發揮」『東奥日報』1969年10月10日。
- (4) 「今後もキメ細かい市政」同上。
- (5) 「現職の強みを發揮」『デーリー東北』1969年10月10日。
- (6) 「郊外で強さを發揮」『東奥日報』1969年10月10日、石沢候補は三度目の市長選挑戦、田名部地区では、徳玄寺住職、元田名部町長という立場から、一時はかなり優勢との声もあったが、昭和38年(1963年)の市長選以来、選挙から遠のいていたこともあって、近郊地帯で票が伸びなかった(前掲書『東奥年鑑 昭和45年版』、78頁)。

⑤1973年の市長選挙

任期満了に伴う市長選が9月30日に行われ、2人が出馬した。その結果は、前県議で革新勢力を結集した無所属で新人の菊池洸治(54歳)が1万1,921票を、現職の河野幸蔵(50歳)は1万0,537票を獲得し、菊池が河野に1,384票の差をつけて初当選した。今回の市長選では、原子力船「むつ」の出力試験問題が最大の争点となり、安全性でなお疑問があるという菊池の主張が、結果的に支持された形となった。菊池は、保守系の「反河野票」と革新票とをたくみに結びつけ、保守の基盤にも乗り当選を手にした。当選後、菊池は革新色をはっきり打ち出し、原子力船の見切り発車を牽制する動きを示した<sup>(1)</sup>。

今回の市長選はむつ市を二分する勢力間での勝負となり、激しい票争い

が演じられ有権者の関心も高まった。ただこの間に、むつ地方では記録的な大水害に見舞われ、“一時休戦”となるなど話題が豊富な戦いとなった。投票率の方は、被災の後始末などに追われたのか、78.32%に留まり、過去4回の市長選では最低であった<sup>(2)</sup>。

上で述べたように、むつ市長選は9月30日に行われ、革新系をバックに立候補した無所属で前県議の菊池渙治が、自民党公認で現職の河野幸蔵を1,384票という予想外の票差で破り初当選し、河野の三選を阻んだ。現役を退けて当選した菊池は、選挙戦では「市民との対話」を掲げ、保守系野党、革新系と幅広い支持を受けたのが大きかった。

一方、三選ならず敗退した河野は、大水害というアクシデントが邪魔をしたのが否めない。与党会派の「自民クラブ」は、市議会で過半数を占める勢力を有しながら、末端で票を固めることができなかったのだ。投票当日は、午前中天候に恵まれたものの、しかし、午後から強い雨に見舞われて、有権者の出足がにぶり、投票率の方は、78.32%とこれまで最低を記録した<sup>(3)</sup>。

見事当選を果たした菊池は、「勝因は若い人たちが寝食を忘れて働いてくれたからだ。短期間の選挙戦が思い通りに進められた」と前置きした上で、当面の課題を次のよう語った。

「責任の重大さを感じている。まず水害の被災者救済、後かたづけが先決だ。生活環境の整備とも関連し、全力を傾ける。懸案の原子力船問題は出力試験に当たって低レベルの放射能を湾内に放出する時の処理、湾内を通常機関で航行するに際しての保障問題、出力試験後に入るドックの決定など、原子力事業団とよく相談して結論を出したい。私の政治的立場はいわゆる革新統一候補として出たのではない。保守党を含めた市民連合を基盤としており、特定政党から拘束されることはない」<sup>(4)</sup>。

『デーリー東北』は、今回のむつ市長選の結果とその影響について、次のように解説しており、自民党県連の苦悩を伝えている。

「自民党青森県連（竹内黎一会長）は9月のむつ市長選、10月の八戸市長選、11月の上北郡六ヶ所村長選に“県連の命運をかける”（菊池利一郎幹事長）とし、選挙体制を強めていた。県内における今後の党勢を占う重大な三連戦であったわけだが、その第一戦を落として県連はショックを隠し切れないようだ」<sup>(5)</sup>。

確かに、菊池は1965年の市長選以来、8年ぶりで雪辱を果たしたとはいえず、むしろ今後の市政運営が正念場である。菊池にとって、多くの懸案事項を抱えての市長当選であって、市民を二分した選挙であった。だが、その“しこり”を市政に持ち込んではいならない<sup>(6)</sup>。

#### 〈注〉

- (1) 「むつ市長選」『東奥年鑑 昭和50年版』〔東奥日報社、1974年〕、80頁。
- (2) 「むつ市長選—菊池氏が初当選」『東奥日報』1973年10月1日。
- (3) 同上。
- (4) 「菊池新市長誕生—むつ河野氏の三選阻む」『デーリー東北』1973年10月1日。
- (5) 「六ヶ所村長選に総力—ショック隠せぬ自民県連」同上。
- (6) 「解説：成功した連合組織—市政にしこりを持ち込むな」『東奥日報』1973年10月1日。

#### ⑥1977年の市長選挙

原子力船「むつ」の存廃をかけ、任期満了を迎えた市長選が9月25日に行われ、これに2人が出馬した。開票の結果、母港存置で地域開発を唱える前市長の河野幸蔵（54歳）が1万4,178票を獲得、一方、「4者協定」の履行で定係港撤去を訴えた現職の菊池渙治（58歳）は1万1,731票に留まり、河野が菊池に2,445票の大差をつけて破り、4年ぶりに市長の座に戻り咲いた<sup>(1)</sup>。

河野は、母港の利益に期待を寄せる有権者の気持ちをつかみ勝利を手にした、といえる。今回は、原子力船「むつ」問題を争点にして注目された市長選であり、そのため有権者の関心はことの他高く、投票率は85.11%

と過去最高を記録した<sup>(2)</sup>。

上で述べたように、市長選は9月25日に行われ、原子力船「むつ」母港存置派の前市長の河野幸蔵が、母港撤去派で現職の菊池渙治を約2,400余票の差で破り、4年ぶりに市長の座に返り咲いた。河野は出遅れが懸念されたものの、選挙戦の中盤から急ピッチで追い上げて、投票日寸前に菊池を逆転し、見事に4年前の雪辱を果たしたのだ。

前回、自民党公認で敗れた河野は今回、自民党推薦の無所属候補として出馬、市内8ヶ所に後援会組織を張りめぐらし、きめ細かな戦術を展開するなど、保守票の掘り起しに成功した。特に、原子力船問題では積極的に開発を進め、地域に経済的効果をもたらそうと訴えた点が、不況脱出のため、何かしらの開発が欲しいという有権者の心理を巧みにとらえ、大湊地区はもとより菊池が有利だといわれた田名部地区でも票を伸ばすことができた。

一方、菊池は陣営内に序盤から楽観ムードが漂い、終盤で河野の追い上げを許す結果となった。菊池は前回の市長選と同様に、保守票主体の後援会組織と社公の革新票を組み合わせた「保革連合」組織に乗って戦った。しかし、市長に就任早々、市は財政危機に直面し、市民受けのする派手な行政を展開できなかった。そのため、前回手にした票をつなぎ止めることができなかった。また、いわゆる「四者協定」を実行することが原子力船「むつ」の平和利用への第一歩と訴えた。だが、それは地元利益を唱える河野ほど票に結びつかず、逆に河野に保守票を食われる結果となった<sup>(3)</sup>。

見事に市長にカムバックした河野は、当選の喜びと当面の抱負を、次のように語った。

『「むつ」の修理問題は長崎県と佐世保市の対応策に食い違いはあるが、今後よく情勢を見極めた上でこちらの対応を練りたい。現母港で核燃料棒抜きは住民の懸念もあり、慎重に期すことはもちろんだ。公約した通り母港存置の件はあくまで貫き。

東通村の原発建設とも関連、むつ市が下北開発の中核体となるよう努力する」<sup>(4)</sup>。

『東奥日報』は原子力船「むつ」の行方なお多難として、市長選を次のように分析している。

「むつ市長に原子力船定係港を誘致した河野幸蔵氏が再び咲いた。河野氏は今度の市長選でも定係港の存置を掲げ、積極的に原子力開発を進めることによって地元利益を得ようと訴えており、同氏の当選は、市民が四者協定を守り定係港を撤去することよりも、存置による経済効果に期待する道を選択したことを意味する」<sup>(5)</sup>。

確かに、河野の再び咲きで、原子力船「むつ」問題は、母港の存置へ急展開する動きを見せている。存置論は長崎県の佐世保港で修理したあと、再び原子力船「むつ」を大湊の現母港に持ってこようというものだ。しかし、革新団体をはじめ漁民の間では、「反むつ」の運動が強く、今後の進展は予断を許さない<sup>(6)</sup>。

#### 〈注〉

- (1) 『デーリー東北』1977年9月26日。
- (2) 「むつ市長選」『東奥年鑑 1979年版』〔東奥日報社、1978年〕、193頁。
- (3) 『東奥日報』1977年9月26日、『デーリー東北』1977年9月26日。
- (4) むつ市長選—河野氏が再び咲く』『デーリー東北』1977年9月26日。
- (5) 「解説：『むつ』の行方なお多難」『東奥日報』1977年9月26日。
- (6) 「むつ市」前掲書『東奥年鑑 1979年版』、210頁。原子力船『むつ』は1973年8月に、漁民の抵抗を振り切って強行出港、その後放射能線漏れ事故を起こし漂流。局面を打開するため、①新定係港を6ヶ月以内に決定する、②2年6ヶ月以内に母港の撤去を完了する—の2項目を骨子とする4者協定が、国と県、県漁連、むつ市の4者により結ばれた。しかし、4者協定は2年半後の1977年4月になっても履行されず、新たな修理港問題が注目されていた(同上)。

#### ⑦1981年の市長選挙

任期満了となった市長選は9月27日に行われ、2人が出馬した。投票の

結果は、前市長の菊池渙治（62歳）が1万3,834票を、現職の河野幸蔵（58歳）は1万2,655票を獲得し、菊池が河野に1,179票の差をつけて市長に返り咲いた。激戦を反映して、投票率は高く81.63%に達した。

自民党、民社党推薦の河野は、未解決の原子力船「むつ」新定係港問題の解決を図り、原子力による下北の開発を推進する立場である。これに対して、菊池は社会党、共産党の推薦・支持をとりつけて、原子力行政の抜本的見直しを訴えた<sup>(1)</sup>。

当初、菊池陣営は出遅れたものの、選挙戦の突入とともに後援会組織など保守と社会党を中心とする革新が両輪となってフル回転、序盤の劣勢をはね返し、逆転に結びつけた。一方、敗れた河野は、自民党の推薦を得て保守層に浸透し、また民社党の推薦も取り付けて一部では革新にも食い込み序盤ではリードしていた。だが、中盤以降、陣営内に楽勝ムードが漂い、勢いが弱まり現職の強みを十分発揮できなかった<sup>(2)</sup>。

詳述するなら、原子力船「むつ」の針路を占う選挙として全国的に注目されていた市長選は、9月27日に行われ、結果は、前市長の菊池渙治が現職の河野幸蔵に千票以上の差をつけて返り咲いた。社会党推薦、共産党支持で保革連合の組織に乗った菊池は、原子力行政の根本的見直しを訴え、自民党、民社党推薦で原子力船の積極的推進を唱える河野を制したのである<sup>(3)</sup>。

選挙戦では、菊池が、昔からの“キクカン信者”が中心となってキメ細かく歩き回る草の根運動を展開し、菊池の誠実な人柄と相まって有権者から幅広い支持を集めた。また、忘れてならないのは、政策面で原子力船「むつ」について原子力行政の抜本的な見直しを主張し、前回は4者協定順守による母港撤去を中心に訴えたが、今回は柔軟な姿勢を示した点が市民に受け入れやすかった。つまり、原子力の安全性に不安を抱く市民層から、菊池の原子力に対する慎重な姿勢が受け入れられたもの、と見られる<sup>(4)</sup>。

『東奥日報』は「解説」の中で、今回の市長選挙を次のように総括した。



「むつ市長に菊池氏が再び咲いたことは、市民の多くが原子力船「むつ」の安全性に不安を持ち、地方を押さえつけるような形で「むつ」の開発を進めてきた国の原子力行政に、一つの拒否反応を示したことを意味する。「むつ」問題は、関根浜新母港へ動き出しているが、菊池氏は五者共同声明は不明確な部分が多いとして見直しを主張しており、市民の安全を預かる市民の立場から国や日本原子力研究開発事業団に注文を出していくことが予想され、これまで国のペースで進んできた母港問題は、大きな曲がり角を迎えることになりそうだ。菊池氏の勝利は、まさに奇跡の逆転としかいいようのないものだった」<sup>(5)</sup>。

『デーリー東北』もまた、「解説」の中で市長選の結果について、次のように報道した。

「原子力船“むつ”問題が選挙戦の最大の争点と見られていたのに、原子力論争はいまひとつ盛り上げられない・・・そんな選挙戦が展開されながら結果は“むつ”問題に慎重論を唱える菊池渙治氏が再び咲いた。いつも政治で揺れ動いてきた下北とは裏腹に、それは劇的なカムバックといえよう」<sup>(6)</sup>。

選挙で勝利し再び市長に再び咲いた菊池は、当選の喜びと今後の課題について、次のように語った。

#### —まず勝因から

金も権力もない私が勝利を取めることができたのは、市民の皆さんと私の信頼とのきずなが強かったからだと思う。行政は信頼関係が基本。市民の信頼にどうこたえていくかにかかっている。

#### —争点となった原子力船の「むつ」の母港や下北半島の原発について今後どう取り組んでいくか

立合演説会でもこの問題に時間を多くかけ主張した通り、市民および半島住民の不安を取り除くことが第一。「むつ」問題では、五者共同声明という形で関根港に母港を建設、「むつ」を大湊に入港させるということだが、例えばどの時点で「むつ」を動かすのかなどあいまいだらけの共同声明だ。今後、共同締結に向け、この五者声明の不透明な部分の解明に当たりたい。また、原発を含めた地域防災計画の市独自の策定を急ぐ。私は、政治家というよりも行政官としてこれらの問題に積極的に対処していく考えだ。

—4年前、大湊再母港化を主張し積極推進の河野氏と対決、4者協定（母港撤去）の実施を求めて敗れ、そして今回一貫して慎重論を通してきたわけだが、市民の意識は変わったと思うか

決めた協定はあくまでも守らなければ住民を裏切ったことになる。河野さんは、この4年間「むつ」の問題について何もしなかったから市民は離れたと思う<sup>(7)</sup>。

菊池は当選後、原子力船「むつ」の見切り発車を牽制する動きを示した。市長選において、原子力船「むつ」の新定係港を関根浜地区に建設するという課題を抱えていた自民党県連は、今回の市長選を特に重視、閣僚級の大物政治家を操出し、推薦の市長選では異例ともいえる支援態勢を敷いた。だが、自民党推薦の河野の敗北で、原子力船「むつ」の針路に不安材料が生まれ、原船原発を軸にして下北の地域振興をはかるという自民県連の構想も大きく揺らぐことになった<sup>(8)</sup>。

《注》

- (1) 『東奥日報』1981年9月28日、『東奥年鑑 1983年版』〔東奥日報社、1982年〕、104頁。
- (2) 『デーリー東北』1981年9月28日。
- (3) 『東奥日報』1981年9月28日、『デーリー東北』1981年9月28日。
- (4) 前掲書『東奥年鑑 1983年版』、184頁。
- (5) 『東奥日報』1981年9月28日、
- (6) 『デーリー東北』1981年9月28日。
- (7) 「『むつ』問題慎重に菊池新市長が記者会見」同上。
- (8) 前掲書『東奥年鑑 1983年版』、184頁。

<補論>—原子力船「むつ」の行方

1981年の青森県は、原子力船「むつ」問題で大きく揺れ、以下のような動きが見られた。1月30日、「むつ」再母港化で県知事の北村正哉が県民の意見聴取を開始。次いで3月4日、科学技術庁官の中川一郎が知事に「むつ」の再母港化を重ねて要請。一方、3月18日、県漁連会長の植村らが科

学技術庁に中川を訪ね、「むつ」再母港化反対の決議書を手渡す。これに対して4月12日、「むつ」問題で中川が来青、国の方針は完成まで大湊停泊、候補地は関根浜と表明。続いて5月6日、県知事の北村、むつ市長の河野、および県漁連会長の植村が「むつ」の外洋移転地を政府に明示するよう要求。また5月8日、自民県連の竹中会長と脇川幹事長が「むつ」母港を関根浜にと要請し、中川が了承。それを受けて5月15日、むつ市長が新母港は条件つきで受諾だと表明。その上で5月24日、中川を迎えた「むつ」問題五者会談では新母港「関根浜」に、そして大湊へは一時入港で合意に達した<sup>(1)</sup>。

こうして、原子力船「むつ」問題は5月24日の五者共同声明により、①新定係港はむつ市関根浜に建設する、②「むつ」は新定係港の建設の見通しを確認の上、大湊港に入港、停泊する、③入港、停泊の取り扱いや大湊港の取扱は今後協議する一などを骨子とした線で動き始めた。一方、地元関根浜漁協では、5月2日に通常総会を開催、原船事業団からの漁業補償交渉の着手要請について諮り、その結果、賛成122、反対70の賛成多数で受諾することを回答し、一応地元の受け入れ態勢は整った。

このため、科学技術庁と原船事業団は、新定係港建設の確認見通しに関し、①技術的に建設可能との立地調査結果、②58億円の新定係港建設予算、③地元関根浜漁協の同意—の3要件を挙げて、地元三者に対して見通しを確認するように要請した。

ただ、原子力船「むつ」は1981年、佐世保での3年間の改修期間を1982年8月末までに延長、8月末には佐世保を出港しなければならなかった。そこで、青森県は、五者共同声明により「むつ」を大湊で受け入れ、関根浜の新定係港の完成をまって新定係港に係留することになった。要するに、原子力船「むつ」問題については、「大湊暫定入港—関根浜新定係港建設」の方向で大きく動き出したのは、間違いのない<sup>(2)</sup>。

しかし、問題はこの間にむつ市長選挙が行われ、原子力船行政に慎重派

の菊池渙治が当選したことだ。菊池は、関根浜新母港について、自然条件としては難しく社会的条件によって決められたものであると批判してきただけに、その成り行きが注目された。その意味で、菊池の返り咲きは、代替エネルギーとして原子力開発を重要施策としてきた国、県、およびむつ市に大きな影響を及ぼすのは避けられない<sup>(3)</sup>。

#### 〈注〉

- (1) 『青森県議会史 自昭和54年～至昭和57年』, 671頁, なお, 北村知事は退任のあとの回顧録の中で, 原子力船「むつ」に関して次のように述べている。「北村も, こう思った。“砂鉄やビートで裏切られた下北開発への期待が, 最先端の原子力ではたせるかもしれない”。だから「北村は“技術の裏付けもなく, 欧米に追い付け追い越せと急いだことが, 多くの問題を生んだ”と回顧する。一方で“むつ”をこう評価する。“国が必要とするものに協力できた”。苦汁をなめさせながらも, “国策に協力する”という姿勢だけは, 崩さなかった」(『人生80年—前青森県知事 北村正哉の軌跡』〔アクセス21世紀出版, 2000年〕, 284頁, 309頁)。原子力船「むつ」について, 詳細は藤本一美『戦後青森県の政治的争点 1945年～2015年』〔志學社, 2017年〕第一部, 第5章を参照。
- (2) 『東奥年鑑 1983年版』〔東奥日報社, 1982年〕, 131頁。
- (3) 『東奥日報』1981年9月28日, 『デーリー東北』1981年9月28日。

#### ⑧1985年の市長選挙

任期満了に伴うむつ市長選は9月22日に行われ, 2人が出馬した。投票の結果は, 県議を辞任して自民党の公認を得た杉山肅(49歳)が1万5,098票を, 一方, 現職の菊池渙治(66歳)は1万4,002票を獲得し, 杉山が菊池に1,096票の差をつけて破り初当選した。初代市長の杉山勝雄は肅の父であり, 二代にわたって市長の座を射止めたことになる<sup>(1)</sup>。

今回の市長選では, 県議四期の実績を有する杉山と, 市長二期8年の実績を誇る菊池との間で, むつ市を二分する勢力の戦いとなり, 終盤まで激しい選挙戦が展開された。そのため, 有権者の関心も高く, 投票率は86.07%と過去最高を記録した。結果は上で述べたように, 原子力利用の推進を唱

える杉山が、推進に慎重で批判的立場をとる菊池を退け、四代目の市長の座を射止めたのだ<sup>(2)</sup>。

詳述すると、市長選は9月22日に行われたが、現職の菊池渙治と県議を辞任して自民党公認の杉山肅との一騎打ちとなり、杉山が現職を破って初当選を果たした。

序盤戦では、杉山は菊池にリードを許していたものの、中盤から急ピッチで追いついて四代目の市長に当選した。杉山は早くから自民党と民社党の推薦を取りつけ、保守を全面に打ち出し、きめ細かな戦術を展開し、保守層の票固めに成功した。つまり、杉山はむつ市の財政赤字を鋭く批判、原子力の積極的推進を提唱し、地域開発を促進して景気浮揚を訴えたが、それが不況脱出にあえぐ、有権者の心を巧みにとらえたのだ。また、杉山の49歳という若さに加えて、実行力と新鮮な期待感が持たれたのも幸いした。

一方、現職の菊池は、序盤でこそリードしていたものの、杉山の追いつきを許す結果となった。菊池は、後援会組織や明るく豊かなむつ市をつくる会の保守票と、社会党推薦、共産党支持の革新票の取りまとめを図り、建設事業を積極的に進めた。しかし、それが財政危機を招き、陣営は今一つ盛り上がりを欠いた<sup>(3)</sup>。

選挙戦を通じて論議的となったのは、来年9月に供用開始予定の原子力船「むつ」の関根浜新定係港および下北地方への立地が計画されている原子力発電所など、一連の原子力問題をめぐる下北半島の振興・発展対策であった。これに対する姿勢は、上で述べたように、杉山が積極的に推進する立場である一方で、菊池は従来通り慎重な姿勢をとった。選挙結果を見る限り、むつ市民は前者の道を選択したわけである<sup>(4)</sup>。

選挙戦では、原子力行政が争点となり、自民党と民社党、社会党と共産党は各々、県議、国会議員を投入し、公認候補並みの支援態勢をとった。むつ市は県内で唯一の革新系市長だったが、杉山の勝利で、自民党は悲願

であった保守系への市政奪還に5年ぶりに成功した。

市長選で初当選した杉山は、今後の課題について次のように語った。

①まず、市財政の赤字解消に努める。スタッフをそろえ、財政健全化、活性化の具体的な手をうつ、公共事業の導入、企業誘致などを行い、市に活力を生み出す。①原船「むつ」の問題については、五者協定の精神を守ってもらうという方針に変わりはなく、計画に基づく実験の推進を促していく、①原子力開発を推進していくことで、市の活性化がかなり期待できる。今回の選挙で、それが理解された。原子力行政については、周辺町村も推進の立場を取っているので、共同歩調をとっていきたい<sup>(5)</sup>。

『デーリー東北』は「解説」の中で、今回の市長選の結果について、次のように報道した。

「初陣・杉山氏の最大の勝因は反菊池勢力の結集、とりわけ下北半島の“原子力化”を県政の最重要課題と位置付ける自民党の総力戦が挙げられる。告示前夜、14日の総決起大会のヒナ壇には、知事をはじめ県選出国會議員団がズラリ顔を並べた。・・・席上、北村知事は「革新色の濃い菊池市政にはほどほど苦汁を飲まされ、泣かされてきた。今後再び続くとするれば、むつ市民、下北住民のためにならない」と“選択”を迫った。「どう喝」にも聞える訴えは、とりもなおさず、北村県政の窮状と危機感を示したものにほかならない。

保守生成の奪還は成った。杉山市長の誕生で半島の“原子力化”は急にアクセルがかかるとは思われないが、ブレーキがはずれたことは確かで、新たな局面を迎えた<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 『東奥日報』1985年9月23日。
- (2) 「むつ市長選挙」『東奥年鑑 1987年版』〔東奥日報社、1986年〕、172頁、「初陣杉山氏が当選—むつ市長選」『デーリー東北』1985年9月23日。
- (3) 『東奥日報』1985年9月23日、『デーリー東北』1985年9月23日。
- (4) 「社説：杉山氏初当 保守奪還」『東奥日報』1985年9月23日。
- (5) 「活力ある市政を一杉山氏抱負」同上。
- (6) 「解説—保守市政に奪還を果たす」『デーリー東北』1985年9月23日。

## ⑨1989年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は10月8日に行われ、2人が出馬した。その結果は、自民党、民社党推薦、公明党が支持した無所属で現職の杉山肅（53歳）が1万6,009票を獲得、共産党公認の新人・新谷徳礼（40歳）は3,528票に留まり、杉山が新谷に1万2,581票の大差をつけて、再選された。選挙戦は、むつ市初の保革一騎打ちとなったものの、杉山の“信任投票”の色合いが濃く、有権者の関心も最後まで盛り上がらなかった。そのため投票率の方は、史上最低の56.86%にとどまった。

杉山は、自民党、民社党に加えて、新たに公明党の支援を受けて万全を期した。政策面では一期4年間の行政手腕を訴え、国、県の協力を得た公共事業の増額、財政赤字減らしなどによる豊かで公平かつ公正な市政を強調し、現職の強みを発揮して再選された<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、市長選は10月8日に実施され、現職の杉山肅が共産党公認の新谷徳礼を大差の得票で破り、再選を果たした。市長の連続当選は1969年以来20年ぶりのことで、一期ごとに市長が交代する“ネコの目市政”に終止符がうたれた。有権者は、杉山の続投による安定的発展に期待をかけることになったと、いってよい<sup>(2)</sup>。

『デーリー東北』は、杉山再選の背景について、次のように論じた。

「事実上の“信任投票”となった杉山氏にとって、圧勝で再選を飾るには無関心という名の“敵”とも戦わざるを得なかった。万全の臨戦態勢も新谷氏との一騎打ちが決まった時点で、陣営内に楽勝ムードがはびこり、激戦慣れ？した市民の間にしらくムードが漂った。・・・杉山氏は一期4年、公約通り国と県との太いパイプを生かした手堅い行政手腕を発揮、自から“マイナス点はないと思う”と胸を張るように、さしたる失政も見あたらなかった。これが結果的に、告示直前まで“互角に戦える候補”を、模索した（元市長の）菊池陣営につけ入るすきを与えなかった」<sup>(3)</sup>。

過去8回の市長選では、保守系あるいは保革相乗り候補が市を二分する

形で激突し、投票率はいずれも70%台後半から80%台を記録。また、選挙戦では、原子力船「むつ」、財政赤字など争点もはっきりしていた。しかし、今回の場合、争点もかみ合わず、棄権する有権者が目立った<sup>(4)</sup>。

再選を飾った杉山は、選挙事務所での勝利の感想と今後の抱負について、次のように語った。

「①選挙結果の予測はついていたが、投票率の伸びが心配だった。(保革対決という)初の選挙で市民の戸惑いがあったが、信頼を得た結果と受け取っている。①本年度、たくさんの大型事業を用意した。二期目はこれからの事業を成功させ、目立たない形で進めてきた福祉充実も一層図りたい。県の力も借りながら市政を前進させたい。①原子力船「むつ」問題は、関根浜の漁民から理解を得られていない。協力を受けられれば実験が計画通り推移し、完了するだろう。①今回(の棄権票は)批判票と思っていないが、初当選時に受けた批判票を受け止めながら市政運営に当たってきた。その姿勢に変わりはない」<sup>(5)</sup>。

周知のように、杉山の父も市長を6年務め、「むつ製鉄」と心中した<sup>(6)</sup>。杉山肅は、中央大学法学部を出て、青森銀行に就職していたが、その後、政治家に転身、市議選二期、県議選四期、および市長二期と、8勝して負け知らずの強運の持ち主である<sup>(7)</sup>。しかしながら、杉山にとっては、市の財政再建の仕上げとともに、最大の公約として掲げた「むつ総合病院」の改築など課題が山積しており、首長としての真価を問われるのはこれからだ<sup>(8)</sup>。

《注》

- (1)「杉山氏、大差で再選—むつ市長選」『デーリー東北』1989年10月9日。
- (2)『東奥日報』1989年10月9日。
- (3)『デーリー東北』1989年10月9日。
- (4)『東奥日報』1989年10月9日。
- (5)「福祉充実を図る」同上。
- (6)「この人—むつ市長に再選された杉山肅さん」同上。
- (7)「ひと—むつ市長に再選された杉山肅さん」『デーリー東北』1989年10月9日。



(8)「事実上の“信任投票”」同上。

#### ⑩1993年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は、10月3日に行われ、2人が出馬した。開票の結果、保守系無所属で自民党・民社党・公明党推薦の杉山肅（57歳）が1万6,168票を獲得し、共産党公認の新谷徳礼（44歳）は2,572票に留まり、杉山が新谷に1万3,596票の大差をつけて三選を果たした。投票率の方は低調に終わった選挙運動を反映、52.79%と過去最低を記録した。市長選では、杉山市政二期8年の評価が問われたものの、事実上、信任投票の色合いが濃く、有権者はこれまでの杉山の実績を評価し、路線継続を選択した<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、市長選は10月3日に行われ、その結果は、現職の杉山が新人で共産党公認の新谷を大差で破り、三選された。杉山は、6月に自民党の推薦を得た後直ちに出馬を表明し、民社党、公明党からの推薦も受けて、保守・中道から幅広い支持を得て、9月中旬から本格的な態勢固めに入った。杉山は、楽勝ムードの引き締めを図りながら、結局、圧倒的リードのうちに勝利を手にしたのである。

実際、杉山は二期8年で懸案だった財政赤字の解消を果たした一方、むつ総合病院改築、観光整備などを実践した行政手腕を強調し、モットーである公正でかつ公平な市政運営を訴えた。これに対して、新谷は、「市民本位の温かい市政」を訴えたが、しかし、候補者選定に手間がかかり、9月半ばでの出馬表明で出遅れたのが響いた<sup>(2)</sup>。

見事に三選を果たした杉山は、選挙戦の感想と三期目の抱負を次のように述べた。

「市民の反応が鈍く、心臓に悪い選挙だった。しかし、34年の市の歴史で初めての三期連続当選は名誉なこと誇りを感じる。責任を十分果たしていきたい。二期8

年間で行政システムの基礎づくりをしてきたつもり。三期目はその上に、“家”を建てていく。建て主である市民の意向をよく聴き、どのような建て方がいいのかをよく考えて『むつ市』という家を建てていきたい<sup>(3)</sup>。

今回の市長選については、『デーリー東北』が次のように総括している。

「市民は二期8年をソツなく務めた杉山市長の“安定感ある政治手腕”を選択した。結果として杉山氏の信任投票的選挙だったともいえるが、市長、市民ともに“地方分権”“地方主権”の時代の流れを十分に認識した街づくりの姿勢は固めたい。低投票率を一つの教訓として一般市民も“己の立つところ深くゆれ。さらば泉わかん”といった、むつ市建設へ政治を通し積極的に参加する心も高めたい。“保守王国であつても政治的後進地”であつてはならない<sup>(4)</sup>。

確かに、杉山は市制を開始して初めて三期連続当選を手にした。赤字財政からの脱却、新たな飛躍を期待する有権者は市政の舵取りを杉山市長に委ねたのである。問題は、“勝負が見えた選挙”に有権者はしらけてしまい。過去最低の投票率を記録したことだ<sup>(5)</sup>。

改めていうまでもなく、首長選は当該地域にとって直接的な民意表出の機会に他ならならず、地域の活性化と振興のテコとなる政治運動であると見るなら、低調な選挙は残念であった。しかし、「民意が出た結果」は当然尊重されるべきであつて、三選された杉山は、今後“声なき声”にも十分配慮して市政を展開することを望みたい<sup>(6)</sup>。

#### 《注》

- (1) 『デーリー東北』1993年10月4日。
- (2) 『東奥年鑑 1995年版』〔東奥日報社, 1994年〕, 173頁。
- (3) 「責任果たしたい—杉山氏が抱負」『東奥日報』1993年10月4日。
- (4) 「時評：低調に終わったむつ市長選」『デーリー東北』1993年10月4日。
- (5) 「保守一本化で“無風選挙”」『東奥日報』1993年10月4日。
- (6) 「時評：低調に終わったむつ市長選」『デーリー東北』1993年10月4日。

## ⑪1997年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は10月5日に行われ、2人が出馬した。その結果は、自民党、新進党、社民連、公明党、および民主党推薦の杉山肅（61歳）が1万3,899票を獲得、共産党公認の奈良せい（62歳）は3,758票に終わり、杉山が1万0,141票の大差をつけて四選された。

市長選では、明確な争点が存在せず、また三回連続の現職と共産党候補との一騎打ちだったこともあって、有権者の関心は総じて低く、投票率は史上最低であった前回からさらに5.2ポイント下回り、47.60%に留まった。

杉山は前年の1996年の12月に四選を目指して出馬表明し、自民党、新進党、社民党、公明党、および民主党の五党の他に、連合の推薦も取りつけるなど、盤石な態勢固めで臨んだ。そこで、選挙戦の焦点は、杉山がいかなる形で勝利するかに絞られ、投票は三期12年におよぶ杉山市政の“信任投票”だと、位置づけられた<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、市長選は10月5日に行われ、現職市長の杉山が奈良に大差をつけて四選を果たし、21世紀に向けた新たな飛躍を期待するむつの市政運営は、再び杉山に委ねられた。だが、投票率は前回の52.8%をさらに下回り、47.60%と5割を割ってしまい過去最低を記録した<sup>(2)</sup>。

実は、投票率の低下を心配する声は選挙戦の序盤から出ていた。五党相乗りの現職候補対共産党候補という構図が有権者をしらけさせてしまったのだ。それに加えて、有権者の足を投票所に向けさせるような明確な争点も見当たらなかった。また、投票率の低下と相まって、杉山陣営にとってショックだったのは、得票数を前回（1万6,168票）に比べ、2,269票も減らしたことだった。それに対して、共産党公認候補（1,186票増）の票が伸びたことは、杉山市政に対する有権者の目が一段と厳しくなったことを意味する<sup>(3)</sup>。

『デーリー東北』は今回の市長選について、次のように報じた。

「過去にない静かな選挙戦だった。三度目の現職対共産の構図。五党相乗りによる保守一本化、告示間際の対立候補の出馬表明、全国的な有権者の政治離れ。理由を挙げればきりが無いが、市民の関心は終始冷めたまま、大方の予想通り、投票率は戦後最低にとどまった」<sup>(4)</sup>。

市始まって以来の四期連続当選を手にした杉山は、今後の課題について、次のように語った。

「こらからの市政は、より厳しい財政運営が求められる。職員たちに力を十分に発揮してもらい、行財政運営を円滑に進めたい」「各町村の力を借り、下北の人口定住のためにも喜びや心から豊かさが感じられる街づくりをしたい」<sup>(5)</sup>。

既述のように、確かに、杉山は市長選で新記録となる、四期連続当選を大勝利で飾った。しかしである。対立候補である共産党公認の奈良も、投票率が低下して50%を割ったにもかかわらず、過去最高の3,759票を獲得し、大善戦であった。その多くは、市立図書館や早掛沼公園問題で強硬姿勢が垣間みられた、現政権に対する批判票に他ならない。杉山は、その重みを十分かみしめて市政に取り組む必要がある<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 「むつ市長に杉山氏4選」『東奥日報』1997年10月6日。
- (2) 「むつ市長に杉山氏4選」『デーリー東北』1997年10月6日。
- (3) 「解説：杉山氏に厳しい審判」『東奥日報』1997年10月6日。
- (4) 「解説：杉山氏に批判票の重み」『デーリー東北』1997年10月6日。
- (5) 「下北の人口定住に努力」同上。
- (6) 「解説：杉山氏に批判票の重み」同上。

⑫2001年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は9月30日に行われ、3人が立候補した。その結果は、自民党、保守党推薦で現職の杉山肅（65歳）が1万2,315票を、無

所属新人の菊池健治（66歳）は1万0,501票を獲得し、杉山が菊池に1,814票の小差で競り勝ち、ついに五選を果たした。石橋忠雄（56歳）は、市民グループからの支援を受けて善戦し、5,175票を得た。選挙戦での最大争点だが、使用済み核燃料の中間貯蔵施設の誘致問題となったことで、有権者の関心が高まり、投票率は72.19%と史上最低であった前回の47.60%を24.59ポイントも上回った<sup>(1)</sup>。

詳述すれば、市長選は9月30日に行われ、現職の杉山肅が菊池健治に小差で競り勝ち、五選された。石橋忠雄は、善戦したが及ばなかった。選挙戦で最大の争点となったのは、市への使用済み核燃料の中間貯蔵施設の誘致問題であった。だが、「推進」の立場である杉山の当選で、同中間貯蔵施設誘致計画の実現に向けて一歩前進した形となった<sup>(2)</sup>。

選挙戦では、杉山は四期16年の実績と経験を強調し、自民党から推薦を受けた他に、市議団14人の支援を取りつけて、態勢固めをした。また、中間貯蔵施設の誘致では、「調査を終えた段階で市民や議会の意見を聞いて判断する」と訴えた。

一方、菊池は、杉山の多選阻止を強く求めた。また、中間貯蔵施設に関しては、公約に「住民投票も視野に入れた凍結」を掲げ、中盤から激しく杉山を追い上げたが、1,814票差で敗退した。石橋は、中間貯蔵施設の誘致の白紙撤回を第1の公約に掲げ、社民党や市民グループの支援を受けて善戦したものの及ばなかった<sup>(3)</sup>。

『東奥日報』は、市長選を終えたむつ市の課題を次のように指摘する。

「有権者が向う4年間の市政のかじ取り役を杉山氏に託したことは間違いない。だが過去3回の無風選挙とは様変わりした激戦、厳しい審判となった。多選批判の逆風もさることながら、市民の十分な論議や合意の積み重ねもなく進められた国内初の使用済み核燃料中間貯蔵施設誘致問題への反発や批判の大きさを物語るものだろう。・・・杉山氏が東京電力に誘致打診を働きかけてきた中間貯蔵施設問題は昨年来、論議を呼んできた・・・立地可能性調査の後、多くの市民に意見を聞き議論を

深めていきたい”と杉山氏は約束した。対話型の市政の原点を忘れず、住民とひざを交えながらの懇談を地道に重ね慎重に取り組むよう求めたい」<sup>(4)</sup>。

史上初めて五選を果たした杉山は、今回の市長選の意義について次のように語った。

「使用済み核燃料の中間貯蔵施設誘致問題の可否を問うような選挙になった。しかし、市政運営はこれだけでない。さまざまな圧力をはねのけ勝利した意味は大きい。この（小差の）結果は悔しいが、これをバネにして頑張っていきたい。協力した皆さんに感謝したい」<sup>(5)</sup>。

『デーリー東北』は、杉山を次のように批判した。それは説得に満ちた論評である。

「五選を果たした杉山肅は、選挙戦を通じて、今なぜ中間貯蔵施設がむつ市に必要なのかについて、多くを語ろうとしなかった。市民の理解が深まったとはいえ、選挙での勝利が“誘致のゴーサイン”とは到底受け止められない。・・・今の杉山氏には“独善的になった”との批判が付きまとう。市民に正面から向き合い、五期目は原点に立ち戻った市政運営がもとめられよう」<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 「むつ市長に杉山5選」『デーリー東北』2001年10月1日。
- (2) 「むつ市長 杉山市五選」『東奥日報』2001年10月1日。
- (3) 『東奥年鑑 記録編 2003年版』〔東奥日報社、2002年〕、37頁。
- (4) 「社説：より開かれた対話型市政を」『東奥日報』2001年10月1日。
- (5) 「勝利の意味は大きい―杉山さん―むつ市長選」同上。
- (6) 「解説：誘致へのゴーサインではない」『デーリー東北』2001年10月1日。

⑬2005年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は10月2日に行われ、都合5人が出馬した。その結果は、現職の杉山肅（69歳）が1万5,995票を、無所属で弁護士の石橋

忠雄（60歳）は9,962票を獲得し、杉山が石橋に6,033票の大差をつけて六選に成功した。共産党公認で政党役員の吉田麟（64歳）は2,096票、行政書士の新谷泰造（55歳）は1,922票、そして会社役員の大久保利夫（62歳）は1,200票に留まり、力が及ばなかった。投票率は58.48%で前回は13.71ポイント下回った。

今回の市長選では、財政再建や使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地への対応などが焦点となった。だが、五期20年の実績を誇る杉山は、過去最多の5人が出馬した選挙戦を制し、選挙の結果を見る限り、市民は現市政の「継続」を選んだ形となった<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、市長選は10月2日に行われ、現職の杉山が多選批判をかわし、新人4人を下して六選を果たした。財政再建や使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地への対応などが争点となったものの、市民は杉山市政の「現状維持」を選んだ、といってよい。

選挙戦では、杉山は自主財源確保のための中間貯蔵施設の誘致、学校や図書館整備など五期20年におよぶ実績をアピールし、その上で「合併してみても経験のある人じゃないと難しいと思った」と、六期目への有権者の支持を訴えた。

一方、石橋は、杉山への多選批判を繰り返し、市政刷新を訴えたが及ばなかった。吉田は5人の候補中で唯一人、中間貯蔵施設の白紙撤廃を訴え、選挙を「住民投票」と位置づけた。しかし、すでに市議会で誘致を議決していたことなどもあり、大きなうねりとはならなかった。新谷は出馬表明が告示3日前と完全に遅れた。また、大久保候補は最後まで知名度不足が響いた<sup>(2)</sup>。

むつ市長選で六選を果たした杉山は、次のように勝利の喜びと今後の課題を語った。

「地方分権の受け皿となり得る街づくり」に向け決意を新たにした上で、「地方にとっては苦難の時代。合併をどうスムーズにまとめ上げていくか

が今後の課題だ」。また杉山市長は選挙中、「最後のご奉公になるかもしれない」「後継者と思っている人たちの成長を期待して見守る」と発言するなど、いわゆる“ポスト杉山”を模索する動きを見せた<sup>(3)</sup>。

『東奥日報』は今回の市長選の結果を次のように分析しており、適切な論評である。

「四市町村の合併後、初のむつ市長選は、過去最多の5人が出馬したが、市民の多くは“刷新”ではなく、“経験と継続”を選択、現職の杉山肅に再び市政を託した。・・・4年前の市長選で現職に1800票差まで迫った菊池健治県議の動向が市民や各陣営の大きな関心事となった。・・・菊池氏は9月に入って不出馬を表明、杉山氏支持に回った。市内の保守二大勢力が“一本化”された時点で、杉山氏六選のレベルが敷かれたといえる」<sup>(4)</sup>。

上で述べたように、今回の市長選は4市町村合併で誕生した「新生・むつ市」の初代市長、しかも下北地域全域のリーダーを選ぶという重要な選挙であった。確かに、投票の結果を見る限りでは、杉山の勝利に終わった一方、多選に対する批判票が一定の数（1万5,180票）に達した事実を杉山は真摯に受け止めねばならない<sup>(5)</sup>。

#### 〈注〉

- (1) 「むつ市長選 杉山氏6選」『東奥日報』2005年10月3日。
- (2) 同上。
- (3) 「杉山氏、実績の勝利—むつ市長選」『解説：保守一本化で態勢固め』同上。
- (4) 「保守一本化で態勢固め」同上。
- (5) 「解説：新市の一体感醸成が急務」『デーリー東北』2005年10月3日。

#### ⑭2007年の市長選挙

杉山肅は2007年5月31日、慢性腎不全のため急逝、享年70だった。そこで、杉山の死去に伴う市長選は7月15日に行われ、3人が出馬した。その



結果は、無所属で新人の前市議会議員・宮下順一郎（55歳）が1万7,953票を、無所属で元むつ市助役の二本柳雅史（70歳）は8,120票獲得、宮下が二本柳に9,833票の大差をつけて初当選した。無所属で新人の新谷泰三（57歳）は、4,493票に留まった。当選した宮下は、杉山市政の継続を打ち出し、使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地、旧ショッピングセンターへの市役所庁舎移転など事業を引き継ぐと、いう。投票率は58.17%に留まり、前回は0.31ポイント下回った<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、杉山爾は5月31日に死去。その杉山の死去に伴う市長選は、7月15日に実施され、無所属で新人の前市議会議員・宮下順一郎が、元助役の二本柳雅史と行政書士の新谷泰造を大差で下して勝利を手にした。

宮下は6月12日に、他の候補に先駆けて出馬を表明。一時、県議会自民党会派に所属する地元選出県議らの出馬の可能性が取りざたされたが、最終的に自民党県連は宮下に一本化することでまとまった。宮下は、「杉山市政の真の後継者」の立場を前面に打ち出し、国政、県政とのパイプを生かした財政健全化、教育施策の一層の重点化、農水畜産物の地域ブランド化による販売促進などの政策を掲げ、自民党系ならではの厚い組織力を生かした運動で、終始有利な態勢で選挙戦を進めた。

これに対して、二本柳は、告示2日前に出馬表明して出遅れたのが響いた。助役二期を含めた40年の行政経験をアピールしたが及ばなかった。前回に続いて2度目の市長選への挑戦となった新谷も草の根選挙を展開して善戦したものの、支持を浸透させることができなかった<sup>(2)</sup>。

市長に初当選した宮下は、勝利の喜びと今後の課題について、次のように語った。

「皆さまの心温まるご支援でこの結果をいただいた。新たな未来へ向けて一つ一つ扉を開け、輝かしいむつ市発展のために、これからも全力を尽くしていきたい。まち

づくりの主役は市民。市民の皆さまの声をしっかりと受け止めて、行政に反映していく」<sup>(3)</sup>。

『デーリー東北』は、当選した宮下の課題を次のように指摘した。

「財政再建、使用済み核燃料中間貯蔵施設への対応、旧ショッピングセンターへの市役所庁舎移転、合併後の旧市町村間の一体感醸成など課題が山積するむつ市。宮下氏はその舵取りに当たって、杉山元市長が敷いたレールの延長線上に、どう“宮下カラー”を打ち出していくか注目される」<sup>(4)</sup>。

『東奥日報』は、今回の市長選における候補者擁立の問題点を次のように指摘している。

「市民や市議の一部で、各陣営の訴えの内容以上に問題視されたのは、自民党県連による候補一本化の動きだった。・・・最終的には党県連が宮下氏の推薦を決め、党内の協力体制をアピールしたが、一連の経緯には市民不在のイメージがつきまとった。これに反発するグループが“市長は市民が決める”と擁立したのが二本柳雅史だった」<sup>(5)</sup>。

宮下は「まちづくりの主役は市民」だと公約に掲げて勝利を手にした。その意味で、宮下にとって、市民が政治に不信感を抱くことのないように、説明責任を大切にする政治姿勢と市政運営が期待されている<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 『デーリー東北』2007年7月16日。
- (2) 「むつ市長に宮下氏」『東奥日報』2007年7月16日。
- (3) 「宮下さん満面の笑み」『デーリー東北』2007年7月16日。
- (4) 「解説：どう打ち出す“宮下カラー”」同上。
- (5) 「解説：“市民主役”の公約注視」『東奥日報』2007年7月16日。
- (6) 同上。

## ⑮2011年の市長選挙

任期満了に伴う市長選は7月10日に行われ、2人が立候補した。その結果は、現職の宮下順一郎（59歳）が1万8,224票を獲得し、前市議で新人の新谷泰造（61歳）は5,192票に留まり、宮下が新谷に1万3,032票の大差をつけて再選。投票率は45.98%で前回は12.19ポイント下回り、過去最低に終わった。

宮下は1月に立候補を表明、前回と同じく、自民党と公明党の推薦を得て万全な態勢を構築し、自民党国会議員、地元選出の3県議、および市議24人の支援を受け、組織力を生かした戦いを進めた。一方、新谷は、建設中の使用済み核燃料施設の中間貯蔵施設について反対を表明し、原子力からの脱却を訴えたものの、市政批判の方に重点が置かれ、支持が十分浸透しなかった。選挙戦では具体的な争点がみえず、宮下の“信任投票”の色合いが強かった<sup>(1)</sup>。

上で述べたように、市長選は7月10日に行われ、宮下順一郎が新谷泰造に大差をつけて再選された。選挙戦は、争点が不明確なまま進み、終始盛り上がり方を欠いた。福島原発事故の後を受け、原子力関連施設の立地や計画が集中する下北半島の中核都市として、原子力政策や防災のあり方も焦点として浮上してきた。だが、それは大きな論戦にはならず、有権者の関心を引きつけることができなかった<sup>(2)</sup>。

『東奥日報』は、宮下に次のように要望した。

「宮下氏は一期目で掲げた“まちづくりの主演は市民の皆さん”“むつ市のうまいは日本一”など、七つの公約を進化・深化させ、“希望のまち・むつ市”にすると訴えた。今後、“希望の街”をどう具現化していくのか。真価が問われる」と指摘。その上で「一期4年で評価されるのは、最大24億円超まで膨らんだ一般会計累積赤字の解消と市役所庁舎移転だ。これらは杉山前市政からの宿願だったが、なお課題は山積している。二期目は“宮下カラー”を発揮し、果敢に立ち向かってほしい」と結んだ<sup>(3)</sup>。

再選された宮下は、「政策をもっともっと進め、深めるように、二期目にまい進していきたい。しっかりと政策を進めていかなければならないと肌で感じている」、と当選の喜びを語った<sup>(4)</sup>。

宮下は、記者団との一問一答の中で、今後の課題について以下のように答えた。

—原子力政策の考え方は

「現在、下北地域の7市町村長会議と担当者レベルの会議を立ち上げ、検討を進めている。(安全性の判断については)どうしても慎重にならざるを得ない状況だ。より安全性を高める形にしていく必要がある」。

—財政健全化に向けた課題は

「(大畑, 川内, 脇野沢の)3診療所の不良債権, むつ総合病院の経営などがハードルになるだろう。中長期的な見通しを立てて取り組みたい」<sup>(5)</sup>。

上で指摘したように、むつ市には、福島第一原発事故を受けて原子力防災のあり方や市財政健全化などの課題が山積している。ことに、エネルギー政策では、原子力関連施設が集中立地する下北地域の中心都市のリーダーとして宮下の責務は大きい<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 「解説・政策論争深まらず」『デーリー東北』2011年7月12日。
- (2) 「むつ市長 宮下氏再選」『東奥日報』2011年7月11日(夕)。
- (3) 「社説:「希望のまち」どう具体化—宮下むつ市長再選」同上, 2011年7月12日。
- (4) 「むつ市長選—宮下さん二期目まい進」同上, 2011年7月11日(夕)。
- (5) 「宮下氏 原子力“慎重に判断”」『デーリー東北』2011年7月12日。
- (6) 「政策論争深まらず」同上。

⑩2014年の市長選挙

宮下順一郎は市長在任中の2014年5月19日に急逝、享年63であった。そこで市長選が6月29日に行われ、2人が立候補した。その結果は、自民党、

公明党が推薦し、無所属新人で宮下の長男である宮下宗一郎（35歳）が2万1,844票を、一方、新人で元市議・行政書士の新谷泰造（64歳）は4,234票に留まり、宮下が新谷に1万7,610票の大差をつけて初当選した。宮下は35歳の若さで、父の死去を受けて立候補を決意し、国土交通省の課長補佐を退職して市長選に挑み、見事に市長の座を手にしたのだ。宮下は選挙戦で、前市長の市政を継承し、国土省での行政経験を生かした経済活性化などに取り組む、と述べた。投票率は、52.98%で前回は7ポイント上回った<sup>(1)</sup>。

詳述すれば、前職の死去に伴う市長選は6月29日に行われ、新人で元国土交通省課長補佐の宮下宗一郎が、同じく新人で行政書士の新谷泰造に大差をつけて初当選を果たした。市長選は新人同士の争いとなったものの、論戦は序盤から低調で、そのため、投票率の伸びも僅かであった。宗一郎は前市長の長男であり、いわば“弔い合戦”の意味があった。そこで、自民党や父の後援会は挙げて若い宮下候補を全力で支援した。問題なのは、宗一郎の一定の行政力量を認めるとしても、政治家としての力量は未知数であった。看板、地盤、カバンのいわゆる“三バン”を保証された上での、「世襲型」当選はいかがなものかと、考えさせられた<sup>(2)</sup>。

宮下は、「政治の力を結集させむつを発展させる強い気持ちで市政運営にあたりたい」と当選の決意を述べた後で、記者団の質問に対して以下のように答えた。

#### —新市長としての抱負は

「当選の実感はまだない。今はただ、まちを発展させるために燃えている。命を懸け、しっかりと仕事に取り組む。市民の声を聞き、本当に困っていることや不安に思っていることを洗い出し、国や県とも連携し、解決できるよう進めたい」。

#### —具体的に何に取り組むのか

「地域の経済活性化だ。雇用を守り、生み出すための取り組みを進める。企業誘致だけでなく、一次産業を含め既存の産業を伸ばすことにも力を入れたい。まちの魅力を高め、教育や福祉などのテーマに積極的に取り組む」<sup>(3)</sup>。

『デーリー東北』は、宗一郎に期待する一方で、次のように注文をつけた。それは、かなり厳しい内容である。

「宮下氏の大勝は、推薦を受けた自民党の組織力、順一郎氏が取り組んだ施策への評価に加え、宗一郎氏の35歳という若さやキャリアへの期待が表れた結果といえるだろう。ただ、宮下氏の街頭での訴えは“むつ市が一番”に代表されるように抽象的で、市政運営に対する理念を強調していた印象が強い。どのように自身のカラーを打ち出し、具体的に何をどう進めていくのか、はっきり示されたとは言い難い。浮揚への道筋を明確に描くのは容易ではないが、地域の将来を託された新市長として、掲げた理念を具体化する材料を早期に提示すべきだ」<sup>(4)</sup>。

『デーリー東北』はまた、原子力の利用に関して推薦の姿勢を示す宗一郎に対し、次のように要望した。

「むつ市の中間貯蔵施設は、各原発で保管している使用済み燃料の受け入れ先として、全国で初めて建設された。しかし、その搬出先は、議論が宙に浮いたまま“第二再処理工場”とされる。さらに原発が縮小に向かえば再処理の必要性は薄まり、“資源”であるはずの使用済燃料が“核にゴミ”になってしまう可能性がある」<sup>(5)</sup>。

〈注〉

- (1) 『東奥日報』2014年6月30日。
- (2) 『デーリー東北』2014年6月30日、『東奥日報』2014年6月30日。
- (3) 『デーリー東北』2014年6月30日。不思議なことに県内の新聞はいずれも、「世襲型」宮下宗一郎の市長当選を問題視していない。筆者は親子で直接市長職を継承するのは、いかがなものかと疑問を感じている。住民の本音を聞きたい。
- (4) 「むつ市長 宮下氏に聞く」同上。
- (5) 「解説：課題山積 問われる真価」同上。

⑰2018年の市長選挙

任期満了による市長選は、5月27日に告示された。だが、自民党と公明党が推薦した、現職の宮下宗一郎（39歳）以外に立候補の届け出はなく、

無投票での再選が決まった。市長選が無投票となったのは、旧大湊田名部市時代を含めて1959年の市制施行以来、初めての出来事である<sup>(1)</sup>。

宮下が無投票で再選された点について、市民の中には「対抗馬となる人材がおらず、寂しい」「政治は進歩しない」という一方で、「無投票でもいい」、と現職に期待する声も聞かれた<sup>(2)</sup>。

無投票で再選された宮下は、次のように喜びを語った。

「多くの市民、支援者の皆さまの支えがあって、ここまで走って来ることができた。あすからまた、誰よりも突き抜けて駆け抜けて、全ての市民に寄り添って市政を進めていきたい」。また、無投票での再選については「4年間の成果を評価し、2期目に緒戦してほしいという市民の総意だと受け止めている」<sup>(3)</sup>。

『デーリー東北』によるインタビュー中で、再選された宮下は無投票当選と今後の課題について次のように答えている。

#### ―市政施行以来初の無投票当選となった

「私が望んだというよりは、市議団、県議、国会議員がまとまって、私を中心に働いていただいた。かつての政争の街で政治的な統合をつくって全体を前に進めることができたのは、歴史的価値があると思う」。

#### ―1期目を振り返って印象に残っていることは

「(市長就任までの)20年間はむつ市を離れていたが、1期目を通じて多くの市民と寄り添い、感動を分かち合う瞬間がたくさんあった。特に、下北ジオパークの日本ジオパーク認定は目に見える形で成果を出し、感動を共有できた」。

#### ―2期目に真っ先に着手したい市政の課題は

「第一の課題として、求められているのは医療改革。むつ総合病院の外来待ち時間が長時間に及んでおり、さまざまな施策を駆使しながら解決に向かっていきたい。これまで以上に行動的に、結果を重視した行政を展開していく」。

#### ―原子力施設が集中立地する地域のリーダーとしての課題にどう向き合う

「何も声を上げなければ地域が忘れられ、ないがしろにされる。施設立地4市町村が連携して国に要望してきた結果として、前倒し交付金、広報拠点整備などの成果が出始めている。この流れを止めることなく、前に進めていく」<sup>(4)</sup>。

宮下は、市民への支持浸透ぶりに加えて、ほとんどの市議から支援を受けるなど、むつ市では今現職に勝てる対抗馬がいないと、早くから無投票再選の可能性が取りざたされていた、という。だが、その一方で、宮下には、市が抱える積年の政治・経済・社会的課題がのしかかっているのを忘れてはいけない<sup>(5)</sup>。

その意味で、宮下にとって二期目に向けて掲げた公約の「住民の声を聞き、寄り添う政治」を実践し、下北地域の将来に確固たる道筋をつける必要があると、思われる<sup>(6)</sup>。

〈注〉

- (1) 「宮下氏が無投票再選—むつ市長選」『デーリー東北』2018年5月28日。
- (2) 「むつ市長選 初の無投票」『東奥日報』2018年5月28日。
- (3) 「宮下氏。無投票再選—むつ市長選」同上。
- (4) 「宮下氏一問一答」『デーリー東北』2018年5月28日。
- (5) 「解説：“無言の支持”責任重く」『東奥日報』2018年5月28日。
- (6) 「むつ市長選 宮下氏再選」『デーリー東北』2018年5月28日。

### 第3章 歴代むつ市長

#### ①杉山勝雄（在任期間：1959年10月3日～1965年8月31日）

杉山勝雄は1910年、上北郡横浜町に生まれた。青森商業高校を経て、中央大学法学部卒。県信用連理事、下北農協組合長を歴任。社会党県連執行委員を務めた。社会党から出馬して県議に当選、これを二期務め、1959年には、無所属で大湊田名部市長に当選した。1960年、むつ市に市名を変更。1963年、自民党入りし、自民党公認で再選。二期目の1965年9月30日に死去。享年55であった<sup>(1)</sup>。

〈注〉

- (1) 『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、348～349頁。



## \* 市長選での得票

・ 1959年の選挙	6,260票
1963年の選挙	7,798票

出典：『むつ市選挙管理委員会』

②河野幸蔵（在任期間：1965年10月20日～1973年10月19日，1977年10月20日～1981年10月19日）

河野幸蔵は1923年5月14日，田名部町に生まれた。東京農大を中退。県議一期。市農協組合長，県観光審議会議長，県林業普及改良組合理事など歴任。1965年10月，むつ市長に当選，二期務めた。1973年10月の市長選では落選。1977年10月の市長選で返り咲いたが，1981年の市長選で再び落選。都合市長を三期務めた<sup>(1)</sup>。

## 《注》

(1) 『東奥日報』1977年9月26日，『デーリー東北』1977年9月26日。

## \* 市長選での得票

・ 1965年の選挙	7,239票
・ 1969年の選挙	1万1,065票
・ 1973年の選挙	1万0,537票（落選）
・ 1977年の選挙	1万4,178票
・ 1981年の選挙	1万2,655票（落選）

出典：『むつ市選挙管理委員会』

③菊池渙治（在任期間：1973年10月20日～1977年10月19日，1981年10月20日～1985年10月19日）

菊池渙治は1919年6月10日、田名部町に生まれた。早稲田大学文学部卒、東京府市立佐藤高等女学校教諭を務めた。むつ市議、同議長、および県議を経て、1973年、むつ市長に初当選、1977年落選。1981年の市長選で返り咲いたが、1985年の市長選で再び落選。田名部農協組合長、斗南会津会会長、県農業統計協会むつ支部長などに歴任した<sup>(1)</sup>。

〈注〉

(1) 『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、816頁。

\* 市長選での得票

- ・1973年の選挙 1万1,921票
- ・1977年の選挙 1万1,731票（落選）
- ・1981年の選挙 1万3,834票
- ・1985年の選挙 1万4,002票（落選）

出典：『むつ市選挙管理委員会』

④ 杉山肅（在任期間：1985年10月20日～2007年5月31日）

杉山肅は1936年、大湊町に生まれた。実家は酒屋。田名部高校を経て、中央大学法学部卒。青森銀行に勤務。下北農協組合長。市議二期、県議四期を務めた後、1985年むつ市長に当選、選挙では負けを知らない。市長に連続6回当選。父勝雄は、初代市長。六期目の途中の2007年5月31日、現職で死去、享年71であった。酒はウイスキー党。趣味はカメラとクロスワードパズル。洗練された話術、よどみない議会答弁には定評があった<sup>(1)</sup>。

〈注〉

(1) 『青森県人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、916頁、「ひと」『デーリー東北』1989年10月9日、1993年10月4日、1997年10月6日、2001年10月1日。「この人」『東奥日報』1989年10月9日。

## \* 市長選での得票

・ 1985年の選挙	1万5,098票
・ 1989年の選挙	1万6,009票
・ 1993年の選挙	1万6,168票
・ 1997年の選挙	1万3,899票
・ 2001年の選挙	1万2,315票
・ 2005年の選挙	1万5,995票

出典：『むつ市選挙管理委員会』

## ⑤宮下順一郎（在任期間：2007年7月15日～2014年5月19日）

宮下順一郎は、1952年むつ市に生まれた。県立青森高校を経て、早稲田大学政経学部卒。「酒の宮下」開業。1995年、むつ市議に当選、同議長を歴任。2007年7月、市長に当選。2011年の7月、再選。2014年5月19日、二期目の途中で死去、享年62であった。趣味は読書、信条は「努力」<sup>(1)</sup>。

## 〈注〉

(1) 『東奥人名事典』〔東奥日報社、2002年〕、1059頁。

## \* 市長選での得票

・ 2007年の選挙	1万7,953票
・ 2011年の選挙	1万8,224票

出典：『むつ市選挙管理委員会』

## ⑥宮下宗一郎（在任期間：2014年6月29日～）

宮下宗一郎は1979年、むつ市に生まれた。県立青森高校を経て、2003年、東北大学法学部卒。国土交通省に入省、2011年、国土交通省都市局まちづ

くり推進課・課長補佐，外務省在ニューヨーク総領事館領事を務めた。実家は酒屋。体力をつけるため朝のランニングが日課だという。2014年，むつ市長に初当選，2018年，無投票で再選。先代市長の宮下順一郎の息子<sup>(1)</sup>。

〈注〉

(1)「この人 宮下宗一郎」『東奥日報』2018年5月28日，『むつ市・市長プロフィール』。

\*市長選での得票

- ・2014年の選挙           2万1,844票
- ・2018年の選挙           (無投票当選)

出典：『むつ市選挙管理委員会』

#### 第4章 政権交代の類型（パターン）

むつ市（旧大湊田名部市）は，1959年9月に市制を敷いて以来，6人の市長を輩出，政権交代が7回生じている。その類型は，①の政治的失態ないし不正によるものが3事例，②の経済的環境の崩壊ないし変動によるものが1事例，③の病気ないし死亡によるものが3事例，そして④の引退ないし権力移譲によるものはゼロである。

むつ市は，原子力船「むつ」の母港として知られ，原子力関係施設を近くに抱える産業都市である。基本的には，保守勢力が強いが，革新系も侮れない。初代の大湊田名部市長は杉山勝雄で，1960年，市名を「むつ市」に変更した。杉山は，1965年9月30日に死去。その後釜を決める10月の市長選では，自民党県議の河野幸蔵が制した。今回の首長交代は，③の病気ないし死亡によるものである。

河野は，二期連続して当選したものの，三期目の1973年9月の市長選では，革新系で前県議の菊池渙治に敗れ，市長の座を追われた。今回の事例

は、原子力船「むつ」と水害が問題となったという意味で、①の**政治的失態**—不正によるものであった。

しかし、1977年9月の市長選では、原子力船「むつ」母港存置派の河野が市長の座に返り咲いた。今回は、①の**政治的失態**—不正によるものである。また、②の**経済的環境の崩壊**ないし**変動**も影響した。河野は、母港の利益に期待を寄せる有権者の気持ちをつかんだのだ。

1981年9月の市長選では、一転して、母港撤退を訴えた菊池が返り咲き、河野は政権の座から追われた。マスコミはこれを“奇跡の逆転”であったと、報じた。今回の事例は、①の**政治的失態**—不正によるものが大きい。ただ、菊池も再び一期のみで退き、むつ市では、一期ごとに市長は変わるという“異常事態”が続いた。

1985年の9月の市長選では、自民党県議の杉山肅が現職の菊池を抑えて、新しい市長に当選した（肅は初代市長杉山勝雄の息子）。杉山は、財政赤字を批判し、原子力の積極的推進、および地域開発の促進による景気浮揚を訴えて、勝利を手にしたのだ。今回の場合は、②の**経済的環境の崩壊**ないし**変動**に伴うものである。

その後、杉山は、何と六回連続で市長選を制し、24年間の長期間、市長の座を独占した。しかし杉山は、六期目に在任中の2007年5月、病気で死去。7月15日、後釜を決める市長選が実施され、無所属新人で前市議の宮下順一郎が他の候補を制して、新しい市長に当選した。今回の事例は、③の**病気**ないし**死亡**によるものである。

だが、宮下も二期目の2014年5月、途中で死去した。後継市長の座は、国土交通省の課長補佐で息子の宗一郎が継承した。この場合も、③の**病気**ないし**死亡**によるものだ。それにしても、現職中に死去する市長が続出、首長の激職ぶりが懸念される。宗一郎は2018年5月の市長選では、無投票で当選した。

## 第5章 むつ市政の特色

むつ市の政治の大きな特色は、戦後一貫して、国・県の政策に左右されてきたことであろう。例えば、「むつ製鉄所」の挫折、原子力船「むつ」への対応、および使用済み核燃料の中間貯蔵問題などがそれである。

上の課題を巡り、むつ市の政治は市民を二分する政争のなかで展開され、市長選でも大きな焦点となり、激しい選挙運動が行われてきた。二代目の河野幸蔵と三代目の菊池渙治との間での、市長の座をめぐる争奪戦は、それを端的に象徴している。

ただ、四代目の杉山肅が市長に就任してからは、保守勢力の支配の下で政権が安定、杉山は六期連続当選し20年以上、市長職を務めた。杉山や宮下のように、親子で市長職を担当した事例が二つもあるのも、むつ市ならではの特色である。

留意すべきは、市長がこれまで在職中に3人も死去したことだ。市政を二分する大きな課題を処理するに際して心労と激務が、市長の命を縮めたのであろうか？ 市長の健康管理にも配慮が必要である。



宮下宗一郎・むつ市長

『むつ市長 宮下宗一郎の画像』bing.com/images

(未完)